

横浜市における基本計画の検討状況

令和 2 年10月30日

横浜市都市整備局

国際園芸博覧会検討会における意見への対応方針

I 国際園芸博覧会の開催意義について

昨年度の検討会で示された「日本で国際園芸博覧会を開催する意義」を意識し、さらに今年新たに生じたCOVID-19による影響や展望もあわせて、A1クラスの国際園芸博覧会としてふさわしい「骨太なコンセプト」を示せるように検討・整理を行っている。

(ただし「観光立国の推進・地方創生」については、COVID-19の影響も踏まえ今後さらに検討。)

i) 世界的な課題、激変する社会を踏まえた開催の重要性

1.1 2027年開催に向けた課題認識

1.2 価値観の変化 1.6 基本認識のまとめ

地球規模の環境問題の深刻化、社会や価値観の変容等を見据えつつ、2050年のあるべき姿からバックキャストすることにより、世界に共通する課題の解決策を示す博覧会とすることを意識して検討・整理した。

メインテーマ「幸せを創る明日の風景」を踏まえ、横浜・上瀬谷で、多様な主体の共創により「人と自然の関わりが『幸せ』につながる社会モデル」を具現化して世界に発信し、自然と共生する心豊かなライフスタイルを定着させていく博覧会を目指す。

ii) 園芸博覧会として開催することの意義

1.3 国および横浜市の将来戦略の視点 1.5 過去博覧会等の継承

国際園芸博覧会の潮流を踏まえ、園芸産業の振興とともにまちづくりや社会課題解決への貢献を意識して検討・整理した。Society5.0が進展する社会において、博覧会を契機として、リアルな花や緑を生活に取り込むライフスタイルや文化が定着するとともに、自らの手で地域や身の回りの環境や景観を保全する意識の浸透が図られること、さらに、園芸を核とした新技術や異業種連携による創造的な新産業の創出につながることで、また、1990年大阪花の万博のレガシー（園芸文化の振興や、自然と人間との共生の理念等）を継承・発展させることを目指す。

iii) 横浜市、上瀬谷において開催することの我が国にとっての意義 1.4 横浜・上瀬谷のポテンシャル 1.6 基本認識のまとめ

上瀬谷の自然資源や農と、横浜の市民力を活かすことにより、人と自然との関係から生まれる価値を「都市と農が共生した魅力的なモデル」として具体的に提案することが可能。これは横浜だけでなく、持続可能な都市と人間居住に係る国内外の共通する課題解決の道筋を発信することとなる。

国際園芸博覧会検討会における意見への対応方針

Ⅱ 事業展開等について

テーマに基づくサブテーマ、事業コンセプトを明確にした上で、会場計画やコンテンツを具体的に検討していく。その際、博覧会に関わる多様な主体により、新たな価値を共創し、展開していくことを基本とする。博覧会開催までの機運醸成の戦略も含め、ご意見やご示唆を踏まえて、今後、具体の検討を進めていく。

i) 国際園芸博覧会のコンテンツについて

4.1 事業運営計画 4.2 魅力を発信するコンテンツ

コンテンツについて、同じ理念を共有する参加者が共鳴して、五感による体感、学び等、国際園芸博にふさわしい体験を提供できるよう、コンペティションや行催事含めて、引き続き具体化の検討を進める。

また、大阪・関西万博との連携や対比を意識しつつ、本博覧会は人と自然との関係の大切さへの気づきと行動変容を促す、リアルな展示や提案を意識して、引き続き検討を進める。

ii) 国際園芸博覧会の会場計画について

5.1～5.3 会場計画

周辺の自然環境や農と連携した会場計画を検討し、ゾーニング方式にとらわれない空間形成、移動にも魅力を持たせるような豊かなシークエンス（移動景観）等、現地の環境価値を活かした自然共生型の魅力的な会場づくりを進める。

また先進のテクノロジー等を活用した新たなモビリティの展開について、運営や計画に柔軟性をもって対応できるよう検討を進める。

iii) 機運の醸成について

6 コミュニケーション計画

コミュニケーション計画において、本博覧会における国内外の訴求すべきターゲットを明確にし、事前からの双方向コミュニケーションを図りながら、プロセスに巻き込み、共創による価値の創造につなげる。価値を体感し、共感する来場者を増やしつつ、博覧会終了後も、価値の創出が継続・発展するとともに、関わった人々の行動変容が実現することを意識して検討を進める。

国際園芸博覧会検討会における意見への対応方針

Ⅲ 国際園芸博覧会を開催する前提となる基盤整備及び現実性について

旧上瀬谷通信施設の「土地利用基本計画」を令和2年3月に策定し、土地区画整理事業や新交通システムに係るアクセス手続き、周辺道路の改良に向けた調査設計など、将来まちづくりを見据えた基盤整備の検討が進められているところ。博覧会開催のための基盤については、まちづくりと連携させながら、引き続き具体の検討を進めていく。

博覧会時の輸送計画については、来場者等の輸送が物理的な根拠を持って確実に行えるよう、複数の輸送手段や運営方法等を検証しつつ、引き続き検討していく。

i) 博覧会区域の基盤整備

7.1～7.3 輸送計画

会場基盤整備のスケジュールが具体的かつ現実的なものとなっているか、あわせて想定入場者数、事業費等が適当かなど、COVID-19の影響等も踏まえつつ、引き続き具体の検討を進める。

ii) 輸送計画

7.1～7.3 輸送計画

輸送計画については、会場近隣の鉄道駅からのシャトルバスやパークアンドライドなど複数の手段を反映したシミュレーションによる検証を行うとともに、過度な集中を避ける方策についても検討を進める。入場者（来場者）数についても、今後、輸送アクセスや会場混雑度の視点、事業採算など複数の観点からの検証を進めていく。

また、まちづくり事業との調整も含め、環境に配慮した駐車場計画の検討を進める。

iii) 将来のまちづくりの基盤となるような博覧会のレガシーの継承

8 レガシー計画

土地利用基本計画では、「郊外の新たな活性化拠点の形成」をテーマとして、多様な交流による賑わいと活気あるまち、都市農業と緑を活かした魅力あるまちづくりを目指していくこととしている。

博覧会によるレガシーを計画的に将来のまちづくりに継承できるよう、引き続き、具体の検討を進める。

今回の検討内容

第1回目（本日）

1. 基本認識
2. テーマ・サブテーマ・事業コンセプト
3. 参加方針
4. 事業運営計画
5. 会場計画
6. コミュニケーション計画
7. 輸送計画
8. レガシー計画
9. 事業費・事業スケジュール

基本認識、サブテーマ、事業コンセプト等を中心に議論

第2回目（12月）

1. 基本認識
2. テーマ・サブテーマ・事業コンセプト
3. 参加方針
4. 事業運営計画
5. 会場計画
6. コミュニケーション計画
7. 輸送計画
8. レガシー計画
9. 事業費・事業スケジュール
10. 会場運営管理計画
11. 情報基盤計画
12. 資金計画
13. リスク管理計画

第1回目検討会で議論しサブテーマ・事業コンセプトから具体的な方針を提示

第3回目（2月）

第1回・第2回
検討会の
取りまとめ

第1回、2回での
議論を踏まえ、計画
市案取りまとめ

1. 基本認識

- ・ 2027年横浜における国際園芸博覧会開催の具体化の検討にあたり、以下の視点からさらに考察を深めた。

1.1 2027年開催に向けた課題認識

- ・ 地球規模の課題
- ・ 国内の課題
- ・ 横浜の課題

1.2 価値観の変化

- ・ デジタルトランスフォーメーション（DX）による社会変化
- ・ COVID-19による社会変化

1.3 国および横浜市の将来戦略の視点

- ・ わが国の成長戦略
- ・ 横浜市の都市戦略

1.4 横浜・上瀬谷のポテンシャル

- ・ 横浜のポテンシャル
- ・ 上瀬谷のポテンシャル

1.5 過去博覧会等の継承

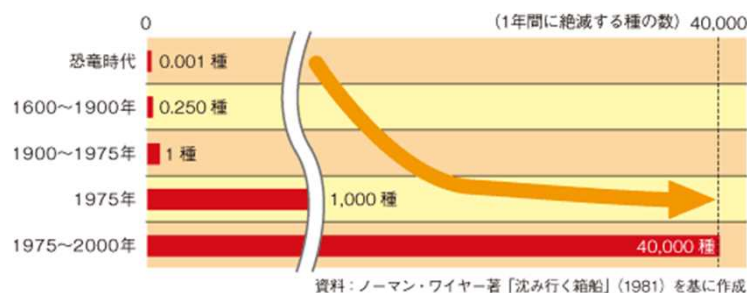
- ・ 1990年大阪花博
- ・ 2025年大阪・関西万博

1.1 2027年開催に向けた課題認識

■ 地球規模の課題

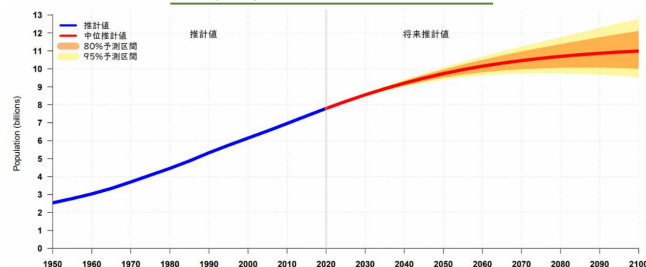
- ・ 人間活動による地球の環境容量が限界に近づき、地球温暖化の進展、生物多様性の喪失、水資源利用の制約や、自然災害の甚大化・頻発化等の課題が深刻化。
- ・ 世界人口は2050年までにほぼ100億人に達すると予測。人口増加を賄うための食料の確保や、人口の3分の2が集中すると見込まれる都市空間の整備管理方法の見直しが課題。

種の絶滅速度



出典：環境省HP「日本の絶滅危惧種と生息域外保全」(R2)

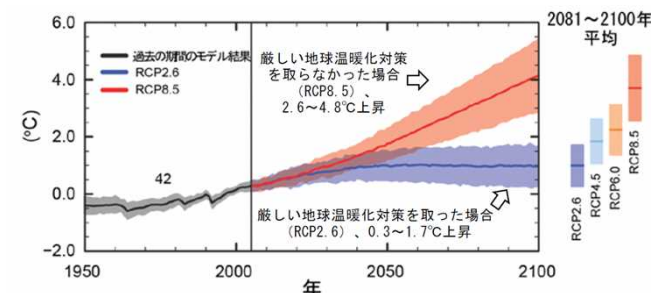
世界人口の推計値



出典：UNIC「世界人口推計2019年版」(R1.7)

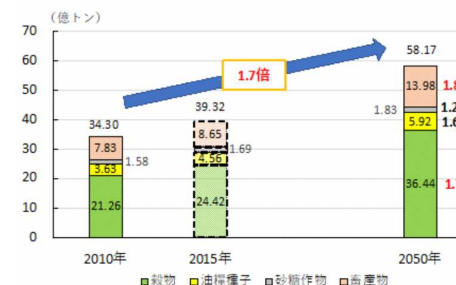


世界平均気温の上昇量



出典：IPCC 第5次評価報告書 第1作業部会報告書 政策決定者向け要約 (日本語訳) の図SPM.7.(a)に加筆 (H30.10)

世界全体の食料需要量の見通し



出典：農林水産省HP「2050年における世界の食料需給見通し」(R1.9)

2050年を視野に入れ、地球環境を次の世代へ継承していくことや持続可能な都市のあり方の検討が必要

1.1 2027年開催に向けた課題認識

■ 国内の課題

- わが国は、他国に比べ自然災害が発生しやすい国土であり、災害リスクの低減はまちづくりの大きな課題。人口減少が続く中山間部や地方都市では生活を支えるサービスの維持、公共インフラの老朽化・維持管理などが課題。
- 古来から自然との関係性の中で培った、里山における自然共生の知恵や技術を経済・社会・環境の調和が取れた持続可能な社会に活かすことが必要。
- 国内の花き産出額は停滞傾向にあり、花き産業や花き文化の振興による消費増、輸出のさらなる拡大などが必要。

各段に高い日本の自然災害リスク



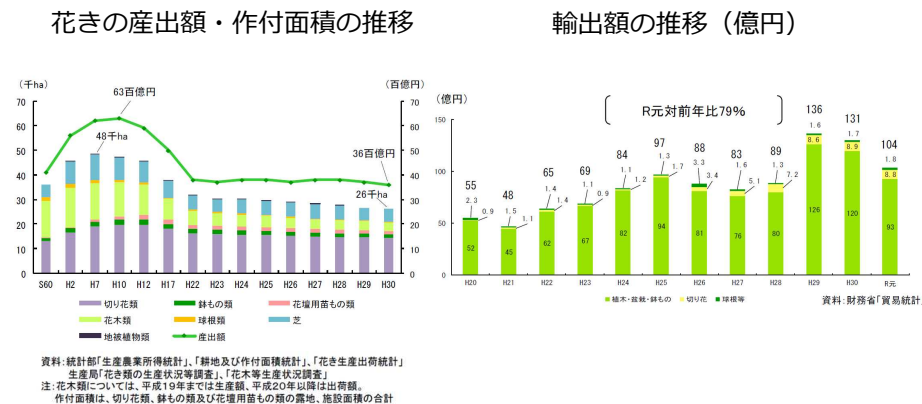
出典：月間事業構想HP「強靱化まちづくりと地域活性化」（H27.4）

里山の環境保全活動



出典：農林水産省HP「里山の植生管理等による環境保全活動」

花きの産出額・輸出額の推移



出典：農林水産省「花きの現状について」（R2.10）

自然環境が持つ多様な機能を暮らしの中で活用する豊富な知恵や文化の価値の再評価、花き産業・花き文化の振興などが必要

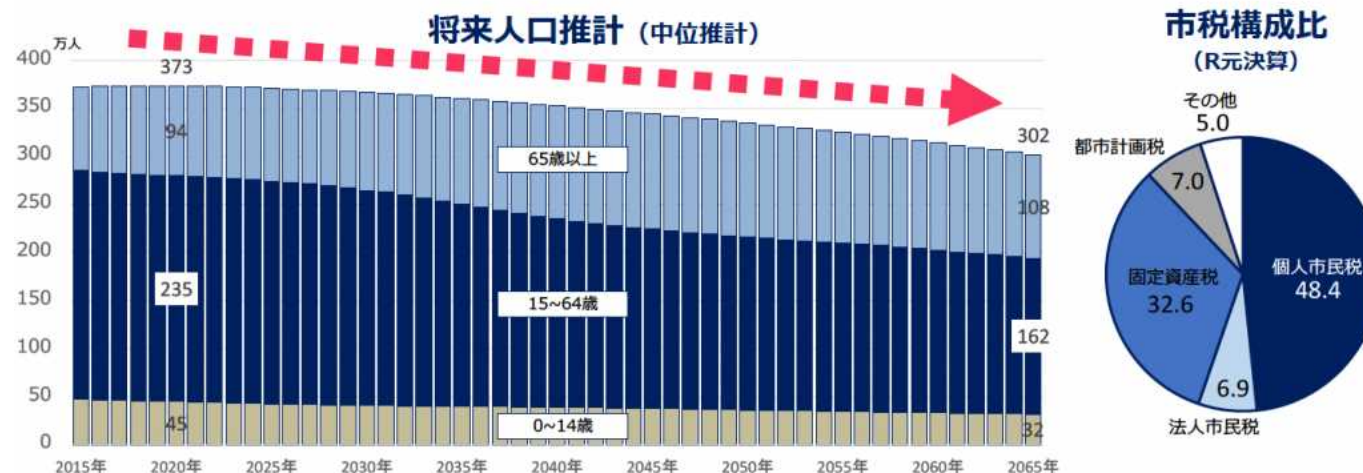
1.1 2027年開催に向けた課題認識

■ 横浜の課題

- 全国的に少子高齢化に伴う生産年齢人口減少や税収減が進み、横浜市においても都市経営の観点から将来的な課題。
- 産業の中心が都心臨海部に集中しており、**郊外部の持つ緑豊かな自然環境などのポテンシャルを十分に活かしていません**。経済の維持・発展のためには、郊外部のポテンシャルを活かした**新産業の創出が必要**。

生産年齢人口の減少による市税収入減

■ 15～64歳人口 2020年 **235**万人 → 2065年 **162**万人（73万人↓）



出典：横浜市財政局HP「横浜市の長期財政推進計」

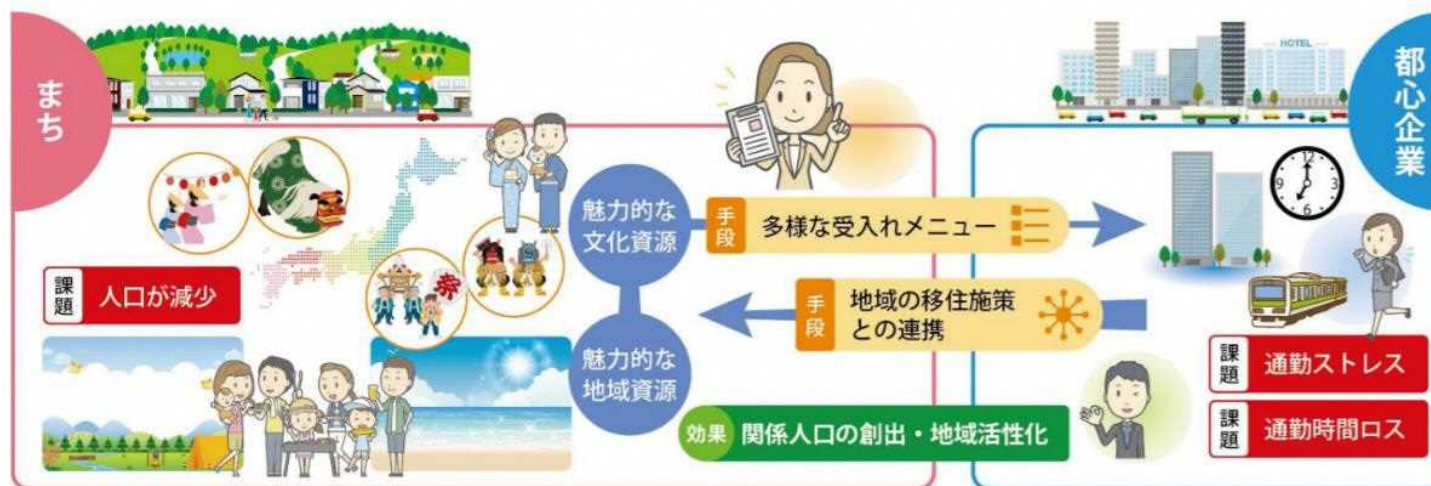
今後、横浜市の郊外部の環境を活かしながら、次なる成長産業を見出し、持続的な活力再生が必要

1.2 価値観の変化

■ デジタルトランスフォーメーション（DX）による社会変化

- 情報通信技術の革新により、リモートワークなど働き方・暮らし方を変える基盤が普及しつつある。
- DX普及の一方で、人は本能的に自然を求め、リアルな体験に惹かれていく傾向が強まっております、花き・園芸が持つ力の重要性が高まっている。
- デジタルネイティブでもある10代～20代の世代(Z世代)には、「自分独自のスタイル」「ダイバーシティー」といった価値観の浸透が進んでおり、これらの価値観を踏まえた社会のあり方が求められている。
- このような変化により新たな産業の展開の兆しが見られる。

DXによる社会変化のイメージ（例）

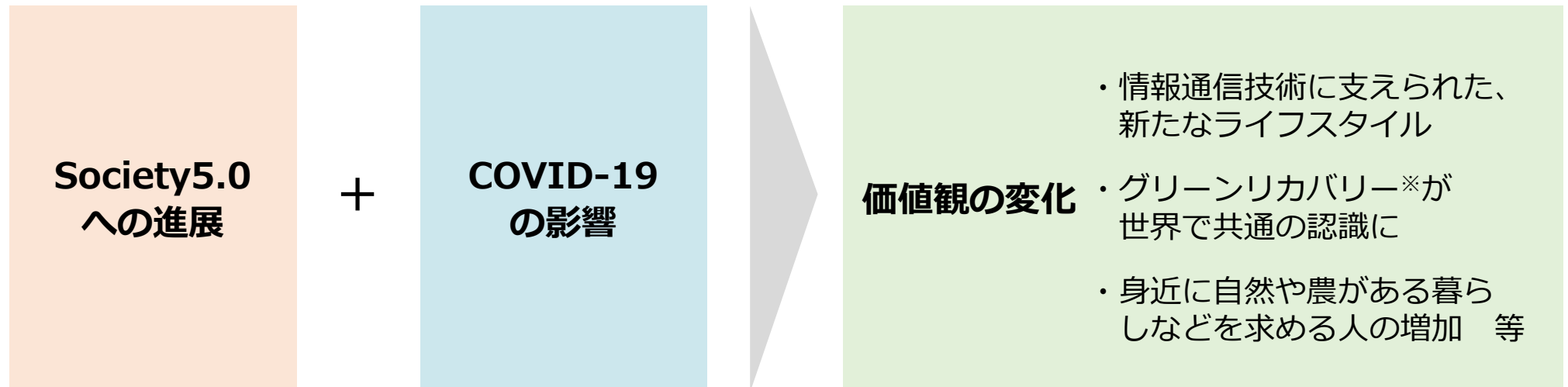


1.2 価値観の変化

■ COVID-19による社会変化

- 生態系システムの危機に対し、持続的な未来に向けた意識が高まってきたところ、COVID-19により、自然とのつながりの大切さを再認識する傾向が加速化。
- マイクロツーリズム、公園の日常的利用、地元産品への志向など、住居に近いエリアに目を向けた行動様式が広まってきた。
- 生活基盤を支える第一次産業・第六次産業への興味、リスペクトは高まり、生産者との直接流通などへの関心も高まっている。

2050年における人と自然の関わり方は、情報通信技術に支えられた共生に進化していくと予測



※グリーンリカバリー：環境に配慮した経済復興

1.3 国および横浜市の将来戦略の視点

■ わが国の成長戦略

花き・園芸・農業分野の可能性を拡げる創造的な新産業の創出

- Society5.0により、社会のあり方に影響を及ぼす新たな技術が進展。本博覧会の開催を通じて、先端技術の花き・園芸・農業など関連する産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を両立するモデルを提示することが期待される
- 今後、オープンイノベーションのもと、バイオ、AI、量子技術等を戦略的に推進。特にバイオ産業については、花き・園芸・農業に関連が深く、裾野が広いことから、新たな産業群の創出等を進める中で、本博覧会が第5次産業革命を牽引していくことが期待される。

新たな価値で経済発展と社会的課題の解決



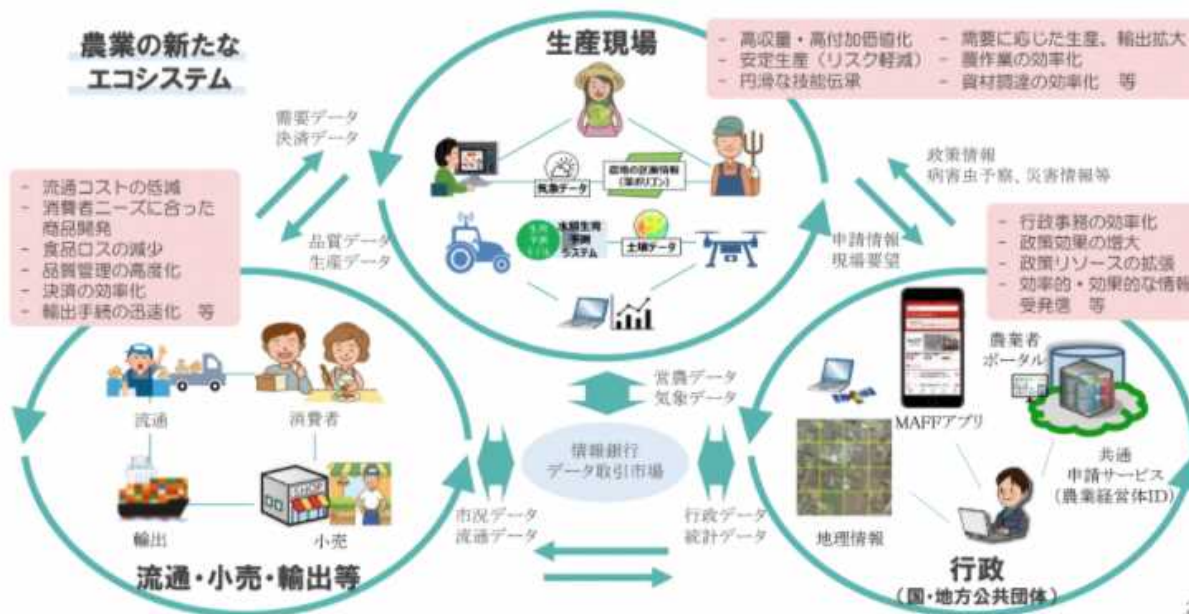
1.3 国および横浜市の将来戦略の視点

■ わが国の成長戦略

花き・園芸・農業分野の生産力拡大と高付加価値化

- ・ 人手不足や後継者問題の中で、最先端技術を活用した生産性・生産力の向上や、次代の農業を担う人材の育成が期待される。
- ・ 社会生活に対する価値観の多様化により、農業に対する考え方も多様化。医療・福祉等、農の領域拡大が期待される。

デジタルトランスフォーメーションによる新しい農業イメージ



出典：農林水産省「農業のデジタルトランスフォーメーション（DX）について」（R1.6）

本博覧会の開催をきっかけに、日本・横浜の都市モデルを率先して国内外に発信することで、わが国の成長戦略の実証ケースへと繋げていくことを期待

1.3 国および横浜市の将来戦略の視点

■ 横浜市の都市戦略

横浜市中期計画(2018-2021)

国際園芸博覧会を契機として

2050年を見据え、国内外の都市をリードする
横浜の都市戦略の方向性

横浜市の 都市ブランド力の強化

- ・花と緑にあふれる環境先進都市の推進、グリーンインフラを基盤とする持続可能な循環型社会、価値感の変化に柔軟に対応する都市を構築

観光・MICEの推進・ 文化芸術創造都市の推進

- ・会場をユニークベニユー※¹として活用するなど、都心臨海部と連携した観光客の回遊性向上
- ・緑豊かな自然環境や歴史的建造物等を活用し、アーティスト等が創造性を発揮することにより、文化芸術によるまちの魅力を向上

都心臨海部と郊外部を両輪 とした都市全体の活性化

- ・「都心臨海部」に「園芸・農を活かした郊外部」を新たな産業発展軸として加え、横浜独自の都市モデルを構築

共創による グリーンシティの構築

- ・産学官が共創し、グリーンインフラに積極的に関わるグリーンコミュニティ※²を形成
- ・横浜のグリーンシティ※³がモデル都市として国内外に発信されることで、国際社会から本市への期待が高まる

※1 ユニークベニユー：地域特性を演出する会議・レセプションの会場

※2 グリーンコミュニティ：自然環境が有する多様な機能をもつ生活基盤（グリーンインフラ）の整備と維持に積極的に関わることで形成される共助の仕組み

※3 グリーンシティ：国際園芸家協会（AIPH）が提唱する、緑地を都市に融合させ、自然と人工環境を統合することにより、よりよい生活と経済活動を可能とする都市

1.4 横浜・上瀬谷のポテンシャル

■ 横浜のポテンシャル

- 「SDGs未来都市」に選定され、環境・経済・社会の三側面からの統合的发展につながる様々な取組を市民・企業等との連携により展開し、環境を軸に、経済や文化による新たな価値・賑わいを創出し続ける環境先進都市の実現を目指している。
- 人口375万人の市民力や専門家のネットワークを有する。
- 大都市でありながら身近な場所で農業が営まれている。また、開港以来蓄積された歴史・文化・産業の資産があり、アーティスト・クリエイターがまちの活性化に繋げている。

横浜市風力発電所 「ハマウィング」



出典：横浜市環境創造局HP

グリーンインフラの例

住宅地の身近にある樹林地や農



出典：横浜みどりアップ計画[2019-2023]

グランモール公園



出典：一般社団法人グリーンインフラ総研HP

1.4 横浜・上瀬谷のポテンシャル

■ 上瀬谷のポテンシャル

- 過去長期に渡り通信施設であったことから、**貴重な自然資本**として広大な農地や平坦な草原、河川沿いの谷戸地形などが残っており、また周辺には市民の森として市民に親しまれている樹林地が存在。
- **農業者が営農を継続**しており、自然を身近に求める暮らしが普及しているなか、直売所など**地産地消の取組みが再評価**されている。
- 自治会や地元団体等で構成される実行委員会と瀬谷区が主催となるフェスティバルが毎年開催され、地域住民の積極的な交流がある。

上瀬谷地区の風景



上瀬谷地区の農業者による直売の風景



横浜・上瀬谷で、人と自然の関係から生まれる価値を再評価し、多様な主体の共創により、都市と農が共生した魅力的な都市モデルを構築し、国内外に発信

1.5 過去博覧会等の継承（1990年大阪花博）

1990年 大阪花博



- ・「**自然と人間との共生**」をテーマに、**産業と生命**、**文明と自然の調和**を確認
- ・花き園芸産業のみならず、**他業種が参画**

<大阪花博での実績・効果>

- ・ガーデニングの普及
- ・国際シンポジウムの実施
- ・海外日本庭園プロジェクトの実施
- ・「都市緑化フェア」「花のまちづくりコンクール」「『みどりの愛護』のつどい」が新しく開催
- ・都市緑化に関する調査研究、技術開発を行う現「(公財)都市緑化機構」の設立
- ・「花きの振興に関する法律」の制定
- ・コスモス国際賞

1990～2000年における世界の動き

気候変動枠組条約、生物多様性条約、ミレニアム開発目標



2001年以降における世界の動き

COP10、**SDGs**、パリ協定



■ BIE、AIPHの対応

- ・1994年 BIE総会決議
(課題解決に向けた**創発・交流型**の万博 への転換)
- ・2011年 AIPH **The Green City Guidelines**制定
- ・2015年 AIPH規則 (成功に向けた取組と役割)

■ 日本の対応

温暖化対策、緑の利活用、生物多様性の保全、農業の多様な振興などに関する戦略、花き振興法の制定 等

2027年 横浜園芸博

2050年に向けた
地球規模の課題・社会変化
COVID-19

- ・大阪花博の**理念の継承と発展（自然と人間の共生）**
- ・自然との共生のあり方として、2050年を見据えた**人々の意識変容・行動変容**が必要
- ・**世界で解決すべき課題が複雑化**する中で、花き園芸産業を取り巻く課題や、社会の多様化に対応するため、**多様な主体の参加による「共創」**が必要

1.5 過去博覧会等の継承（2025年大阪・関西万博）



- 本博覧会の2年前に大阪・関西万博が開催され、登録博と認定博を連続して開催する世界初の試みとなるため、両者の連携と相乗（シナジー）を意識
- 大阪・関西万博からの「**継承と発展**」と本博覧会の「**独自性**」が重要

継承と発展

- テーマの関連性（いのち、幸せ）
- 2050年（SDGs+Beyond）を見据えた課題解決の実験、提案を行う場
- 連続開催により、来場者の意識変革をより強く定着。大阪・関西万博のレガシーを継承

独自性

- 人と自然との関係の大切さへの気づきと行動変容を促す、リアルな展示や提案
- 特に、園芸博として花・緑・農に主眼を置いた展示や提案

2025年 大阪・関西万博

開催年 : 2025年4月13日～10月13日（184日間）
会場 : 大阪 夢洲（ゆめしま）
博覧会種別 : BIE登録博覧会
テーマ : いのち輝く未来社会のデザイン
サブテーマ : いのちを救う
いのちに力を与える
いのちをつなぐ
コンセプト : 未来社会の実験場（People's Living Lab）

2027年 横浜国際園芸博

開催年 : 2027年3月～9月（予定、180日程度）
会場 : 横浜市 旧上瀬谷通信施設
博覧会種別 : AIPH世界園芸博覧会（A1）
BIE認定博覧会（申請予定）
テーマ : 幸せを創る明日の風景
サブテーマ : （後述）
コンセプト : （後述）

1.6 基本認識のまとめ

2027年開催に向けた 課題認識

- ・地球環境を次の世代へ継承
- ・2050年のあるべき姿からバックキャスト

DXやCOVID-19による
価値観の変化の加速
・情報通信技術に支えられた共生

横浜と上瀬谷の ポテンシャル

- ・人と自然の関係から生まれる価値を再評価

国および横浜市の 将来戦略の視点

過去博覧会等の 継承

国際園芸博覧会の具体化に向けた方針

世界共通の課題解決に向け、2050年を見据えた、人と自然の関わりが「幸せ」となり、主体的な参加を促す社会モデルを、横浜・上瀬谷から世界に発信し、次の文明の先駆けとなる祭典とする

2027年国際園芸博覧会において体現したい目標像

- ・ 花・緑・農と私がつながり、生命と活力が溢れる未来
- ・ 自然への敬意、自然と共生した価値を創造する

【博覧会がもたらす効果】

- ・ 新たな花き・園芸文化の創出と関連産業の発展により、世界の人々に心豊かなライフスタイルが定着する
- ・ 郊外部活性の都市モデルとして、日本・横浜でのグリーンシティを国内外に発信する
- ・ 横浜の発展の中心である都心臨海部と、「花・緑・農と私がつながり、生命と活力が溢れる未来」を生み出す郊外部が両輪となった都市の未来像を築き上げていく。

1.6 基本認識のまとめ



旧上瀬谷通信施設は、戦後約70年間、米軍が接收。土地利用が制限され、開発がなされなかった。

土地利用の制限により、現在も広大な草原が残り、農地では露地野菜の栽培が行われている。



2015年米軍から返還。

Society5.0が進む中COVID-19が感染拡大
テレワークの普及等により価値観が変化



<時代の転換>

自然とのつながりの大切さを再認識



上瀬谷に残った広大な草原や農地、地域で脈々と受け継がれた農の営みは、高いポテンシャルを秘めた貴重な財産

2050年を見据え、上瀬谷で、ICT等の最先端技術を実装し、緑と融合した都市モデルを構築し国内外へ発信

通信施設跡地の平和的利用の象徴的先例

2.1 メインテーマ・サブテーマ・事業コンセプトの関係

メインテーマ

幸せを創る明日の風景 – Scenery of the Future for Happiness –



サブテーマ

メインテーマを展開し、具現化するための切口。特に、各国や企業等への招請に際し、各主体の関心分野と博覧会を具体的に結びつけ、出展の意思決定をする際の判断材料となるもの



博覧会の事業展開を念頭に一体的に整理

事業コンセプト

メインテーマ・サブテーマに基づいた博覧会事業（会場、展示、行催事、事業構造、運営など）の展開にあたり、全体に通底する具体的な方針・方向性として、博覧会事業に携わる全ての関係者が重視・共有すべきもの

2.2 サブテーマ・事業コンセプトの検討プロセス

「基本構想案」をベースに、昨年度からの検討および今年度実施した有識者ヒアリング等の内容を踏まえ、横浜市でサブテーマ（案）と事業コンセプト（案）を整理

基本構想案（H30.3）

メインテーマ

幸せを創る明日の風景 – Scenery of the Future for Happiness –

事業コンセプト

先進性と普遍性を体感

～新たな行動と創造につなげる博覧会～

多様性と寛容性を共感

～より深く浸透させる博覧会～

シェアとリンクを実感

～社会全体に広める博覧会～



昨年度検討

国検討会における意見

横浜市の検討

今年度検討

有識者ヒアリング等の意見を踏まえた横浜市の検討



サブテーマ（案）

事業コンセプト（案）

2.3 サブテーマの検討

サブテーマ：メインテーマを展開し、具現化するための切口。

特に、各国や企業等への招請に際し、各主体の関心分野と博覧会を具体的に結びつけ、出展の意思決定をする際の判断材料となるもの

メインテーマ 幸せを創る明日の風景 – Scenery of the Future for Happiness –

昨年度の検討、有識者から頂いた意見等

里山など地域の限られた資源を持続的に利用する知恵や技術

自然の近くに住み、働く場と家庭や仲間との時間・空間が近接

花・緑・農・自然を身近なものとして暮らす楽しみ

農業×〇等で農の領域拡大（園芸療法、健康、美容等）

ICTを活用し環境負荷の見える化を通じた縮減と地域の自然資本を活かした都市開発

余暇や趣味としての花・緑・農の営みや生物多様性への関わり

日本がトップランナーの技術を活かした新産業の創出

国際社会への共創成果の展開

自然と共生するグリーンインフラの定着した社会の実現

デジタルを活用した花・緑・農×スマートな暮らし

バイオを活かした花き・園芸産業の付加価値向上

共創プラットフォームの実現

野菜や果樹を育て、食べる楽しみ

花・緑・農・自然と生きる持続的な住まい方・働き方

新たなビジネス展開（薬用植物・機能植物等）

市民・企業が参加・共創することによる新たな知の集積

サブテーマ（案）

自然との調和

緑との共存

新産業の創出

連携による解決

2.3 サブテーマの検討

自然との調和

Co-adjustment

※直訳：相互調整

日本の里山にみられる自然との共生の知恵や、災害大国としての経験を活かし、自然環境が有する多様な機能（生物の生息・生育の場の提供、良好な景観形成、気候変動対策、自然災害の緩衝等）を発揮するグリーンインフラにより、持続可能で安全かつ魅力ある都市の土台づくりを世界に向けて提案

有識者意見など

- 日本では古来より自然や生物と共存する生活が続けられてきた。
- 高度経済成長期で失ったものを取り戻そうという動きとして里山資本主義、里海資本主義という動きがある
- 植物の生き方に学びながら、自分たちの生き方を振り返るとよい。
- グリーンインフラをつくるのが目的でなく、生かすのが重要。
- リモートワークへの切り替えにより、自然の近くに住む人が増えている。
- ウィズコロナの時代に、身近にあった自然に気づき、屋外の大事な場所を発見している。
- 衣食住の観点でウェルビーイングを求め始める。
- スマートフォンやウィキペディアのように参加型の仕組みがあるが、それらをまちづくりに取り込みきれていない。
- どうやって地球と共存していくか。日本は過去に学べる。
- 植栽や環境に対し、どう共存するかの実装例を示す場とすると意義がある。
- 気候変動や災害と向き合い、どう向き合っているのかが分かるとよい。
- WEBではトライアンドエラー、アジャイルという考え方が重要で、都市の中にどうやってインストールするか
- 幸せが単純に人間の価値だけではなくて、その場所にとっての幸せ、その場所においてのあるべき姿

2.3 サブテーマの検討

緑との共存

Co-existence

※直訳：共存、共生

生態系システムの危機に対し、持続的な未来に向けた意識が高まっている。人々は自然とのつながりの大切さを再認識し、本能的に自然を求め、五感で感じられるようなリアルな体験に魅力を感じるようになった。博覧会が人々を、自らの手で花や緑を生活に取り込み、美しい景観を維持するといった意識に導くとともに、将来的な環境負荷の抑制に繋げ、生活基盤の維持に各々がジブンゴトとして積極的に関わるグリーンコミュニティのあり方を提案

グリーンコミュニティ：自然環境が有する多様な機能をもつ生活基盤（グリーンインフラ）の整備と維持に積極的に関わることで形成される共助の仕組み

有識者意見など

- ・ 日常にある花や緑に目を向ける心の余裕（一輪の花を愛でる感性）が大事。
- ・ 博覧会をきっかけに、農への関わりや移住が促されると良い。
- ・ 今後は、農業にデザイナーなど異分野の人が参入するようになる。（半農半X）
- ・ ポータブルスキルをもった人が参与できる産業が農。
- ・ 農業はダイレクトに感謝が伝わる環境があるので、自己肯定感も高めやすい。
- ・ 生産者と消費者のコミュニケーションはICTにより双方向になり、容易になっている。
- ・ 生産と消費を分けずに、市民自身が育てることが求められている。
- ・ 流通チャネルの多様化により生産者が個人の属性を活かしやすくなっている。
- ・ ハッピーとしてユートピアを見せるのは異なるだろう。本当に幸せな社会には、10%の危機感が必要。
- ・ 人が離れていくが、自然がある場所・居心地のいい場所にいることが幸せなのではないか。幸せの風景は、いつの地点なのかで異なる。
- ・ 園芸は暮らしの楽しみの部分であり、人をつなぐきっかけとなる。終わったあとにも暮らしに残るとよい。

2.3 サブテーマの検討

新産業の創出

Co-creation

※直訳：共創

先進国の共通課題である郊外部活性化や途上国での農村から都市への人口流入の緩和を進めるためには、職住近接といった新しいライフスタイルに合わせた産業の創出が重要である。また、環境に配慮した経済復興（グリーンリカバリー）の考え方が世界で共有される中、産業として花き・園芸・農の役割は大きい。博覧会を実験の場として、農業の高付加価値化や新技術、異業種連携による農の領域拡大、産学官連携を通じた産業育成など、新産業の創出を提案

有識者意見など

- 世界に冠たる日本の花き・園芸文化（品種改良技術、生け花、庭園等）を発信できると良い。
- ゲノム編集は日本がトップランナー。規則作りと開発が平行して動いている。
- 全くの異業種の企業と花との世界を生み出すことができるのでは。
- 「Well Being」の観点で人と自然の関わりを見せられるとよい。植物があると学習がはかどるとか健康回復効果がある等。
- 博覧会をどのように産業振興に活かしていくのか。
- 企業は、研究プロセス・成果をシェアし、多く人と対話して事業を育てていくという問いかけをしてはどうか。
- 日本から発信できる産業的な園芸を押し出すことは過去博とは差別化できる。
- 博覧会は、実験の場との塩梅が必要。仮設だからできることと、新しいものが生まれてくることが重要。
- 実験性・チャレンジする、何かができそうということが重要

2.3 サブテーマの検討

連携による解決

Co-operation

※直訳：協調、連携

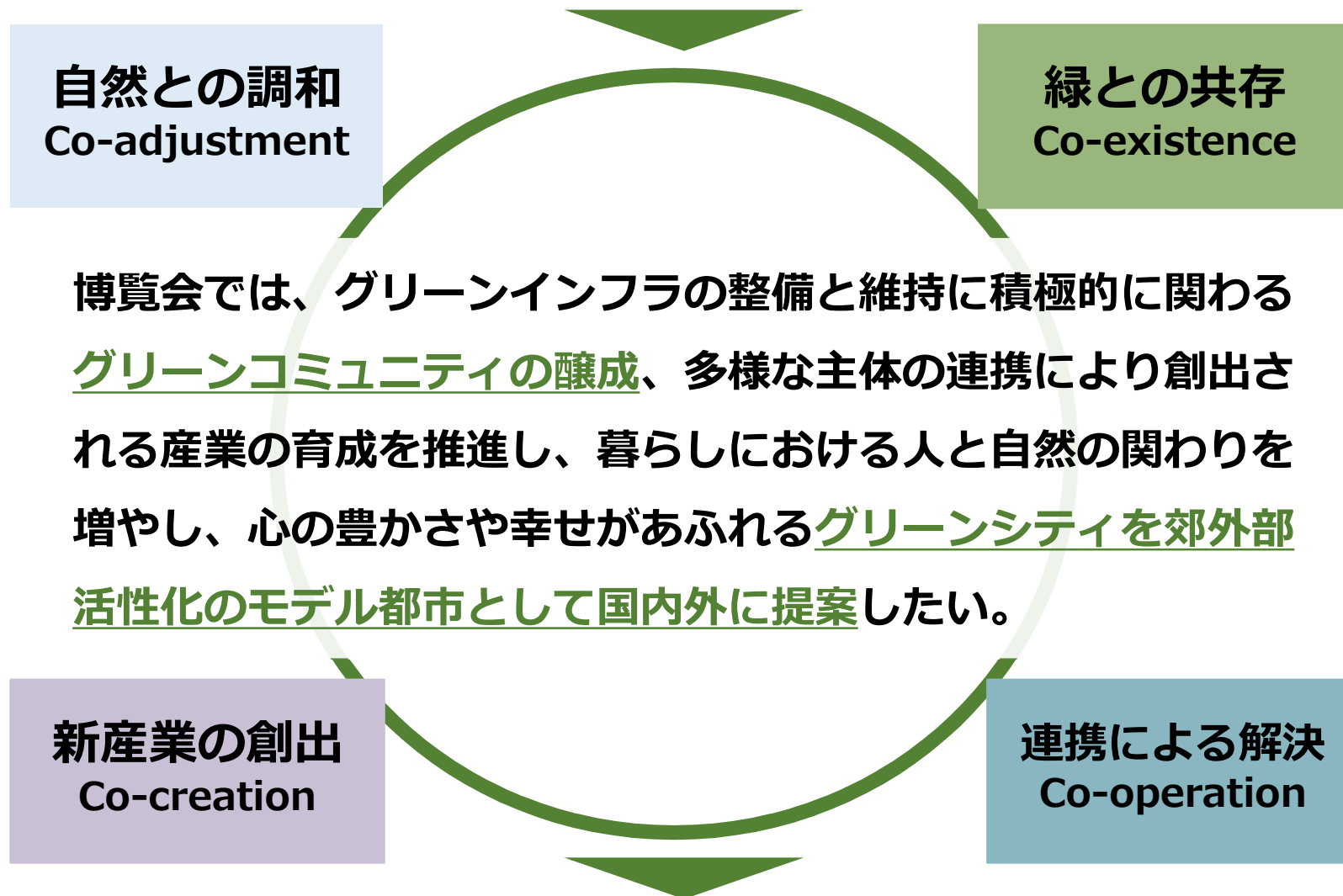
横浜市の特徴である市民力や、創造性豊かな各分野の専門家の国際的ネットワークを活かすとともに、国内外の企業や教育・研究機関等へも積極的に参加を促し、日本の古来から培われた技術や知恵を活かしながら、業種横断的な参加システムを構築することで、世界的な課題解決の方法を提案

有識者意見など

- ・ 特に若い世代においてソーシャルインパクトへの関心が高まっており、日本文化にある自然と共生することを世界へ発信することは意義がある
- ・ 都市や地域の農地や公園などを再生、再編集するときには、多様な人の参加が重要
- ・ 地域で人との交流があり、住みやすい生活を完結できることが重要になる
- ・ 緑や公園を通じて、幸せになれる、住みやすく楽しいと思える風景をつくれるきっかけとして、博覧会のプロセスにあらゆる人の参加を促せると良い
- ・ 市民が欲しいと思う施設などをレガシーとして残すなど、市民との共創・関わりができると面白い。
- ・ パビリオンや庭が、市民・世界の人をアダプトし、世界中とつながって向こうでも何かがおきるなど、インパクトを示すとよい。
- ・ 社会実験のような博覧会となるとよい。未開の文化を主催者が示すのは終わりであり、新しいフィロソフィーを示し、新しい知恵を集める博覧会となるとよい。
- ・ 環境や植栽には新しい知的な関わり方が必要。社会実験を追体験できる仕組みがあるとよい。
- ・ 経験のひとつひとつが、他者と生きることの肯定感につながる。園芸博はパブリックではあるが、自分の家に持ち帰ったときに、学びがあり、それをきっかけにプライベートをパブリックに開くようなことがあれば、財産となる。

2.3 サブテーマの検討

メインテーマ 幸せを創る明日の風景 – Scenery of the Future for Happiness –



2027年国際園芸博覧会において体現したい目標像

- ・ 花・緑・農と私がつながり、生命と活力が溢れる未来
- ・ 自然への敬意、自然と共生した価値を創造する

2.4 事業コンセプトの検討

事業コンセプト：メインテーマ・サブテーマに基づいた博覧会事業（会場、展示、行催事、事業構造、運営など）の展開にあたり、全体に通底する具体的な方針・方向性として、博覧会事業に携わる全ての関係者が重視・共有すべきもの

基本構想案（H30.3）

先進性と普遍性を体感

～新たな行動と創造につなげる博覧会～

多様性と寛容性を共感

～より深く浸透させる博覧会～

シェアとリンクを実感

～社会全体に広める博覧会～

昨年度の検討、有識者から頂いた意見等

歴史や古くからの共生のあり方を見せる

立ち戻る、気づく、ケアする、というキーワードが重要

地域で暗黙知化されているものを引き出しプロデュースする

人と人の出会いの創出、効率化や均質化とは異なる価値観の提示

不思議さに眼を見張る感性を取り戻す機会にする

自然と共生しつつ快適に暮らす知恵や技術に改めて価値を見出し、積極的に活かす

博覧会は新たな行動を生み出す場

博覧会で、自分が積極的に何かの作り手になれるとよい

提供する人と観る人の2軸ではなく、様々な観点や軸を入れると面白い

各自が博覧会をつくることに関与する

「みんなでつくる・つくり育てる」博覧会とする

属性の違う人々をつなぐデザインができると良い

市民参加による成熟した園芸文化の発信

多様な園芸文化・庭園文化の魅力を発信する

会場全体をグリーンフラを基盤とした街と捉え次世代都市モデルとして展開

日本の里山という原風景や持続可能、Eco-DRR等につながる知恵の実現

環境の変化に対しライフスタイルや社会を変えていくことが必要

異業種や国際交流による新たなビジネスチャンスの拡大、産業振興につながる事業展開

博覧会における商業のあり方が大事

都市の中での農業とコミュニティが融合した新しいモデルの創出

事業コンセプト（案）

私たちは〇〇

価値を再定義する

行動変容に繋げる

環境負荷低減を徹底する

多様性に気付く

分かち合う

領域を拡大する

2.4 事業コンセプトの検討

価値を再定義する

Revise

日々、情報技術が進歩するなかで生活の利便性は向上し続けるが、その一方で、COVID-19による生活の変化もあり、自然を身近に感じるライフスタイルを求める傾向にある。古来から変わらない価値を再評価、再定義するとともに、日常を支える隠れた手段として最先端技術を提示し、新たな気づきにつなげる。

多様性に気付く

Find

多様な主体が出会い、交流することで、物事の捉え方や見え方の多様性に気づくことができ、事業の広がりや相乗効果につなげることができる。本博覧会では、より多くの人々が準備段階から連携し、博覧会を創り上げる一員となることを目指す。

2.4 事業コンセプトの検討

行動変容に繋げる

Change

博覧会を通じて得られる気づきをきっかけに人々の行動変容につなげることを意識し、来場者が参加し体験できる仕掛けを展開する。この経験を博覧会参加後もそれぞれの暮らしのなかで楽しみながら行動し続けることの重要性を伝える。

分かち合う

Share

博覧会に参加し、交流や体験で得た気づきやアイデア、行動変容の楽しさや重要性を身近な他者と分かち合い、博覧会のテーマ・サブテーマを社会全体に広めていく一員となることを各々が意識できる仕組みをつくる。

2.4 事業コンセプトの検討

環境負荷低減を 徹底する

Care

緑を都市に融合させ、生活空間と経済活動空間のより良い統合を目指すグリーンシティの概念を可視化し世界へ発信する。来場者や出展者、運営など、博覧会に携わる全ての関係者が環境負荷低減を徹底的に意識し、グリーンシティの実現を目指す。

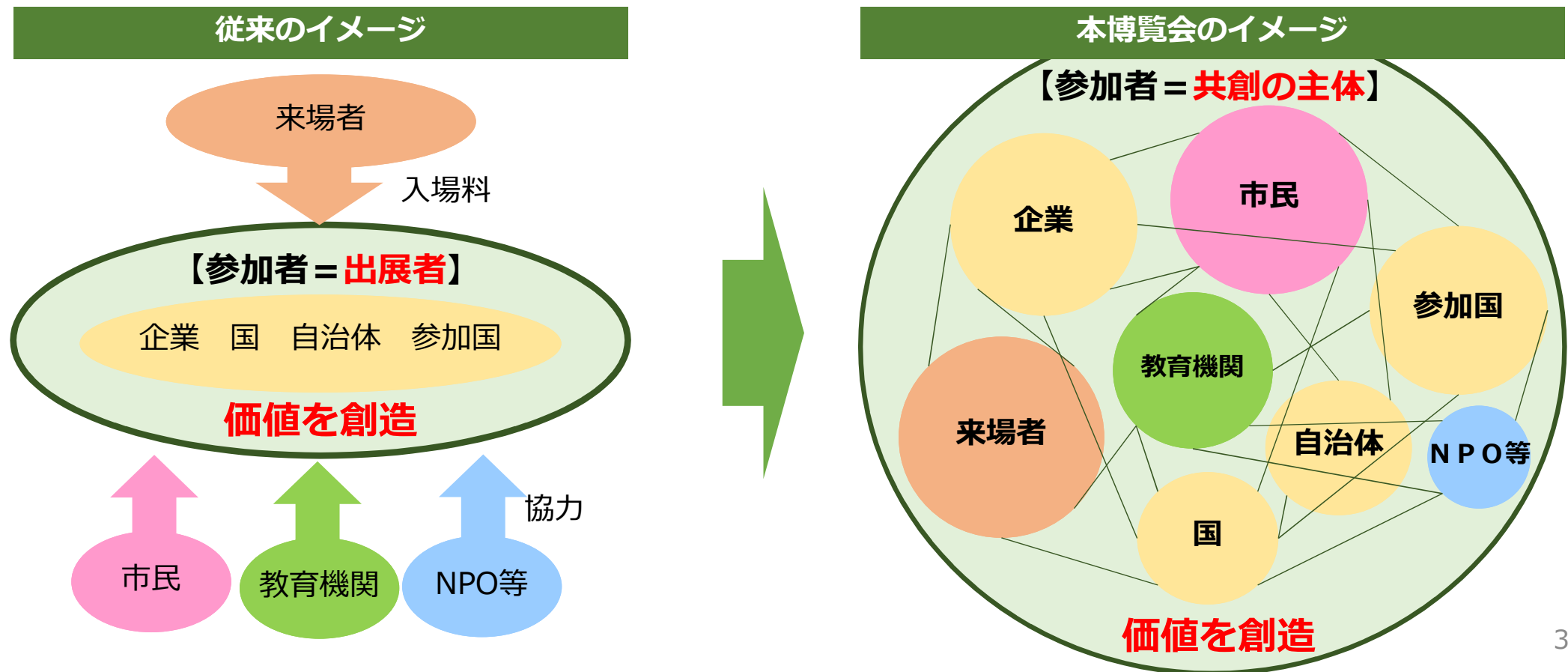
領域を拡大する

Expand

環境に配慮した経済復興（グリーンリカバリー）が世界で共通の認識となっている。また、都市やライフスタイルのあり方に変化がみられる。これに対応するため、博覧会を実験の場として、世界共通の課題解決につながる個人の意識や産業の領域拡大を目指す。

3.1 参加方針の考え方

- 本博覧会においては参加者を広くとらえ、国、自治体、参加国、企業、来場者、市民、NPO、教育機関等、博覧会に係わる全ての主体を「参加者」と定義する。
- これらの「参加者」が本博覧会のメインテーマである「幸せを創る明日の風景」を実現するため、主体的に共創する参加方針としていく。
- 園芸博覧会においては、花き・園芸・農業等の産業振興を強く意識すべきであり、多様な「参加者」の共創により、産業の領域拡大や担い手の活性化などの取組の発展を目指す。
- 会場計画や事業運営計画など個別計画の作成にあたっては、参加方針をベースに検討を進める。



3.2 参加方針に基づく事業展開

- 博覧会のテーマ・事業コンセプトに沿った「特定テーマに関連するコンテンツの集合体」を多数構成し、同じ理念を共有する参加者が共鳴・共創できる展開を行い、博覧会終了後も共創が継続（＝レガシー）されることを期待する。

特定のテーマに関連するコンテンツの集合体による展開

従来のイメージ



ゾーン型の展開

機能、サービスの集約化、効率化が可能

本博覧会のイメージ



特定テーマに関連するコンテンツの集合体による展開

多様な主体が出会い、新たな価値を多数創出

- また、この展開は、来場者の同一箇所への集中を防ぐことができるとともに、来訪日毎にシーンを巡る楽しみ等複数回の来場を促す。
- 出展を含め多彩な主体からの多様な資金の集め方についても検討

3.3 特定テーマに関連するコンテンツ

【コンテンツのテーマ例：花のちから】

- 本博覧会のテーマに関心をもつ、アーティストやアパレルブランド、ゲノムなど最先端技術の研究を進める研究機関、花き農家、市民団体等の参加により、「花のちから」をテーマにしたコンテンツを展開。

展示



【ファッション】

- 世界的アパレルブランドやアーティスト、花き農家が連携したファッションショー
- エコへの取り組みを、服のデザインやもの作り、素材、ショーの会場も含めて行う
- 若年層への訴求も見据えた国内イベントとの連動と、国内企業の参加を促進

展示 参加



【先端技術】

- 研究機関とコラボし、ゲノム技術による青く発光するバラの花畑
- 上瀬谷の自然をベースに、VR/AR技術を用いて幻想的な花のイルミネーション

共鳴・共創



参加 飲食



【食】

- エディブルフラワー（食用花）を活かし、環境に優しくかつ美・健康を意識したメニューを開発
- アパレルブランドと農家がコラボしたカフェを展開し、より幅広層にエディブルフラワーを体験

参加



【美・健康】

- 国内の花き農家と世界的なコスメブランドが連携し、花から抽出したエキスを活用した商品を開発
- 中身や容器、制作手法もエコや持続可能に配慮した商品を体験
- 花きだけでなく、医薬分野とのコラボも促進

博覧会で得た気づきをきっかけに、普段の暮らしに取り入れ、周囲と分かち合い、共創の輪を広げていく。

3.4 特定テーマの例

野菜

食育、エディブル、農

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● 土づくり ● 野菜作り ● 収穫体験 ● 料理教室 | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● 朝どれ野菜 ● 野菜カフェ ● スムージーバー ● ビーガン |
|----|--|----|---|

イメージ



ハーブ

薬草園、美容、健康

- | | | | |
|----|---|----|---|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● オードトワレ ● リース ● 手作り化粧品 | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● 薬膳レストラン ● ハーブティー |
|----|---|----|---|

イメージ



発酵

発酵食品、美容、健康

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● お酢づくり ● ピクルスづくり ● ピザ ● 発酵文化 | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● 発酵食レストラン ● ビアガーデン |
|----|--|----|--|

イメージ



都市の先端園芸産業

先端農業、AI、IoT、Robotics

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● 工場見学 ● 栽培体験 ● 収穫体験 | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● フルーツを使ったパフェなどのスイーツ ● フルーツマト |
|----|--|----|--|

イメージ



里山の風景

スローライフ、自然資源のエネルギー

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● 貸畑 ● 間伐材木材加工 ● 里山暮らし | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● ジビエ料理 ● 釜飯 |
|----|--|----|---|

イメージ



菌類/カビ

インナービューティー、ミクロの世界

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 体験 | <ul style="list-style-type: none"> ● 世界のチーズ ● ヨーグルト作り ● キノコ類 ● 乳酸菌・酵母菌 | 飲食 | <ul style="list-style-type: none"> ● 発酵食レストラン ● チーズレストラン |
|----|--|----|--|

イメージ



4.1 事業運営計画

- 人類の進歩や将来の展望を示すことや公衆の教育を目的とする万博とは異なり、国際園芸博覧会は、**国際的なレベルで花や緑を通じた健康と福祉、環境の向上、園芸技術の向上、経済強化等**を目的として開催される
- 園芸博開催当初から、コンペティションは園芸博覧会の役割を果たすために重要な要素である
- 従来のカテゴリに、本博覧会のテーマやサブテーマに沿ったカテゴリ（共創の取組、緑化活動等）を追加し、本博覧会の目標も体現する企画とする

国際園芸博覧会の役割

- 社会の健康と福祉、環境の向上、および経済の強化をはかるための植物利用の促進
- 社会における園芸（商品・技術）の必要性和、人々と自然や環境とのつながりにおける役割を明確化
- 世界の最高水準の知識と最先端の技術を推進し、文化と園芸の多様性を深める
- 園芸のプロフェッショナルとして生産性と国際協力の促進

国際園芸博覧会でのコンペティション

北京国際園芸博覧会でのコンペティションに係る展示の様子

屋外展示



屋内展示



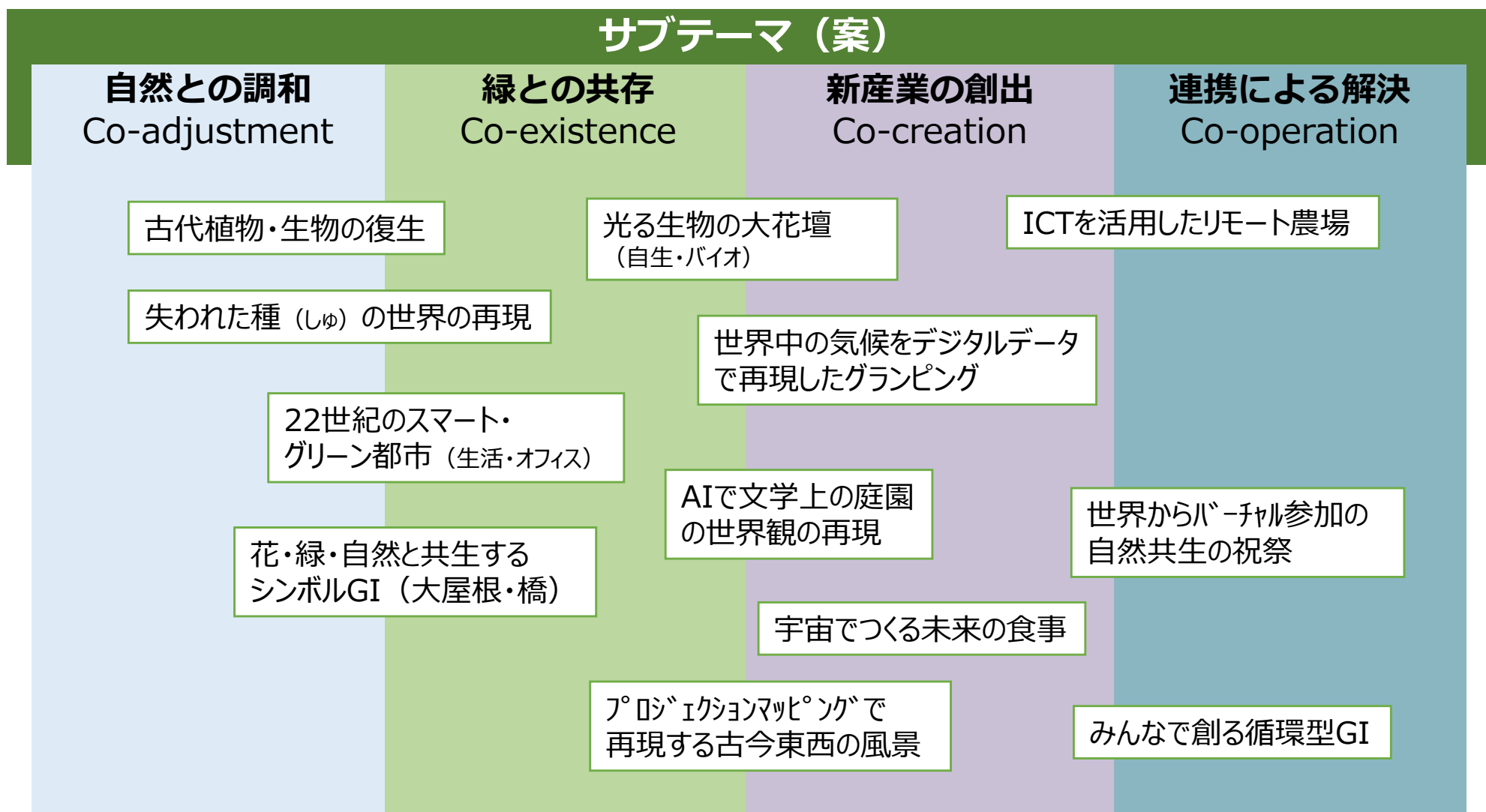
国際園芸博覧会における
コンペティションの種類例

屋外	庭園
	花壇
	野菜・果樹
屋内	切り花
	フラワーアレンジメント
	観葉植物
	伝統的な庭園技術

4.2 魅力を発信するコンテンツ

- 本博覧会を象徴し、魅力を発信するコンテンツについて、メインテーマ・サブテーマを踏まえ、今後、事業化に向けて計画の具体化を深める。

メインテーマ 幸せを創る明日の風景 – Scenery of the Future for Happiness –



5.1 会場計画検討の視点

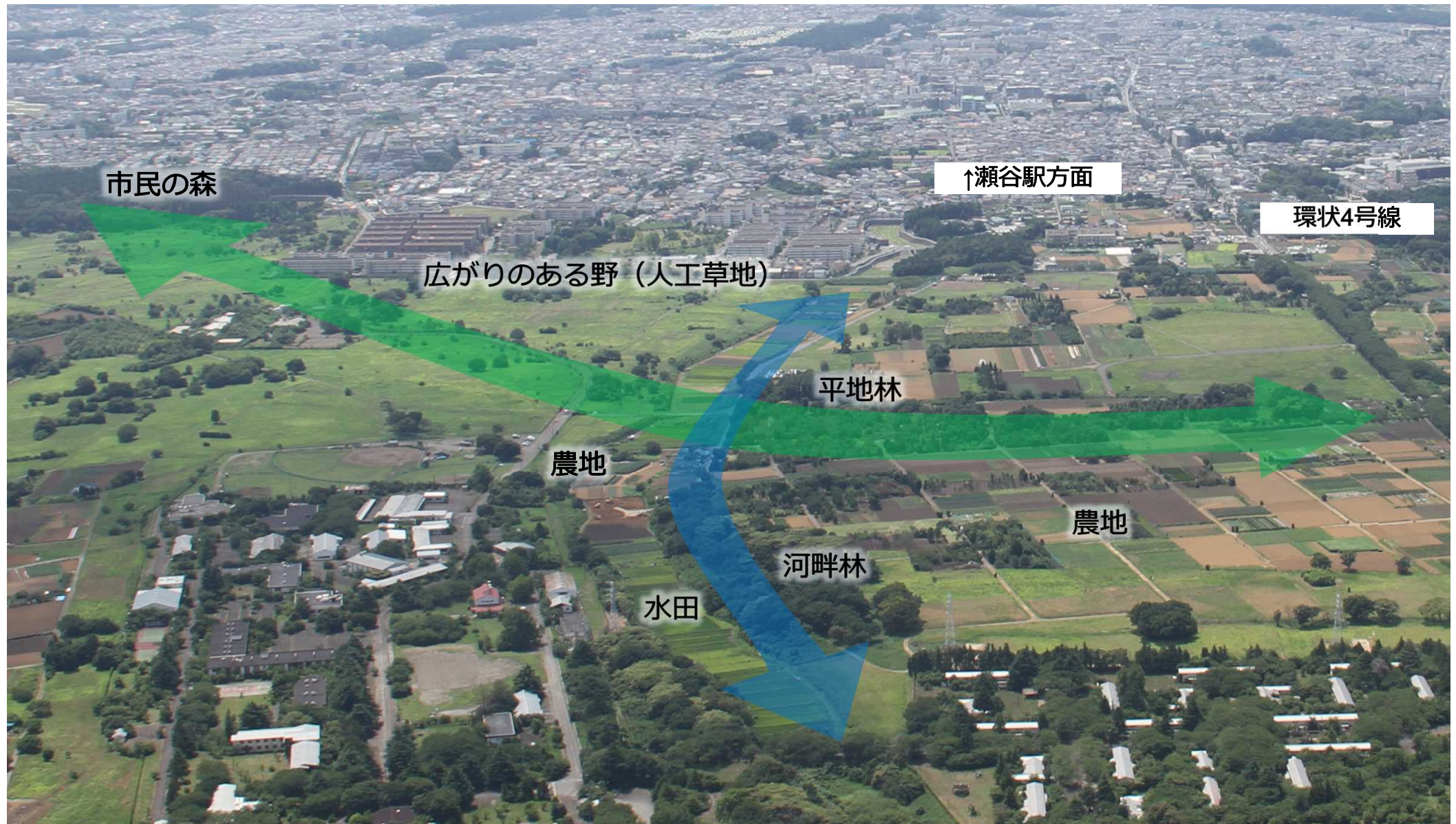
- 微地形、水系、既存樹林など現地の環境価値を最大限活かすことによって、横浜・上瀬谷らしいグリーンインフラを実装した自然共生型の会場づくりとする。
- 四季や朝夕の移り変わりに応じて、花壇等の展示や行催事の演出とともに施設配置、機能、動線など会場自体が変化・成熟していくことを検討する。
- 会場計画は、事業運営、コミュニケーション、資金など他の個別計画と連動させ、公園など将来のまちづくりも見据えて包括的に博覧会のプランニングを行う。
- リアルな空間や時間が生み出す体験、参加を基調としつつ、デジタルトランスフォーメーション（DX）によって多くの人に関わることができるバーチャル会場等の導入を検討する。
- 多様な主体の参加や相乗効果を図るため、従来の機能別ゾーニング方式にとらわれることなく、展示、体験、サービス等が複合した小さな自律分散型のコミュニティ空間を会場内に配置する。

5.2 土地ポテンシャルを活用した会場計画の考え方

- 市民の森・和泉川の緑のネットワーク軸（東西軸）と、相沢川軸（南北軸）を包含した会場区域
- 微地形や樹林等を活かした豊かなシークエンス（移動景観）が、来場者にとって会場内の移動自体が魅力（コンテンツ）
- 新たな交通に直結する区域を中心とし、会場構成要素の集合点（エントランス）
- 周辺の自然環境や農との連携



5.2 土地ポテンシャルを活用した会場計画の考え方

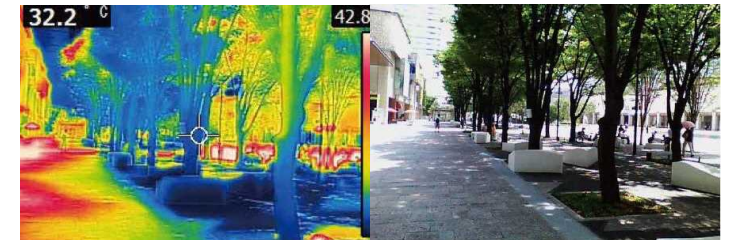


5.3 具体化に向けた着目点

- 世界に発信する自然と共生する持続可能な会場とするため、里山の資源循環システムに着目し、雨水循環や再生可能エネルギーなどによる自律循環型会場
- 日本庭園や日本建築等の空間づくりの思想と技術の活用
- グリーンインフラの実装に向けた自然環境の持つ効果の見える化
- AIやIoTなどの先端技術を活用した円滑な来場者の移動
- 展示、サービス、運営施設等の多機能化、コンパクト化
- 木材をはじめとする自然素材の積極的な活用と再利用
- 遮熱、通風、気化熱など暑さ対策の徹底
- 子供の視点でのわくわくする会場づくり



「三溪園」



出典：東邦レオ株式会社HP「グリーンインフラによる微気象緩和効果」(グランモール公園)

※今後、建築物デザインやユニバーサルデザインなどの方針、ピクトグラム等のサイン計画を定め、協会や参加企業等が整備する建築物や構造物に適用し、会場の景観形成に資する仕組みをつくる。



フォレストアドベンチャー・よこはま

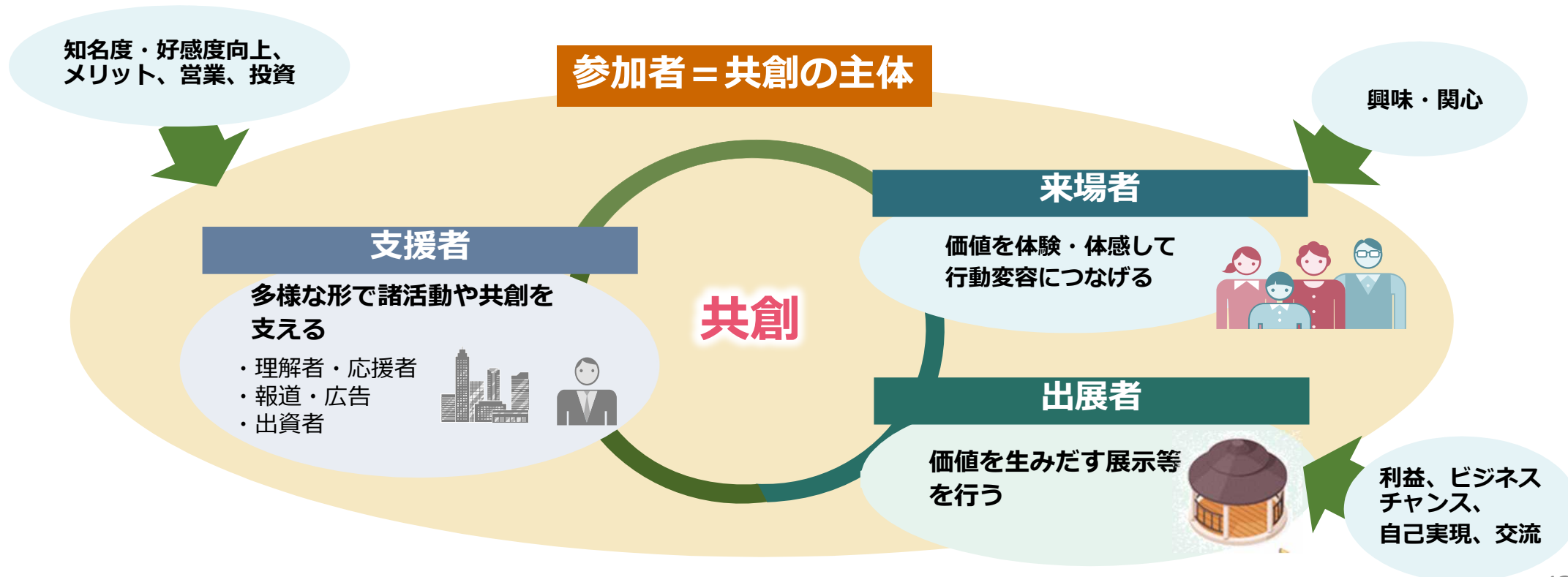
6. コミュニケーション計画の考え方

6.1 コミュニケーションの基本的な考え方

- ・ 博覧会への理解・認知と積極的な参加を促し、多様な主体の「共創」により価値を生みだし、その価値の「体験・体感」を通して、博覧会の目標達成に資する。
- ・ 参加招請、来場促進に加え、安全な輸送等に資する情報提供を行い円滑な博覧会運営を支える。

6.2 コミュニケーションのターゲット

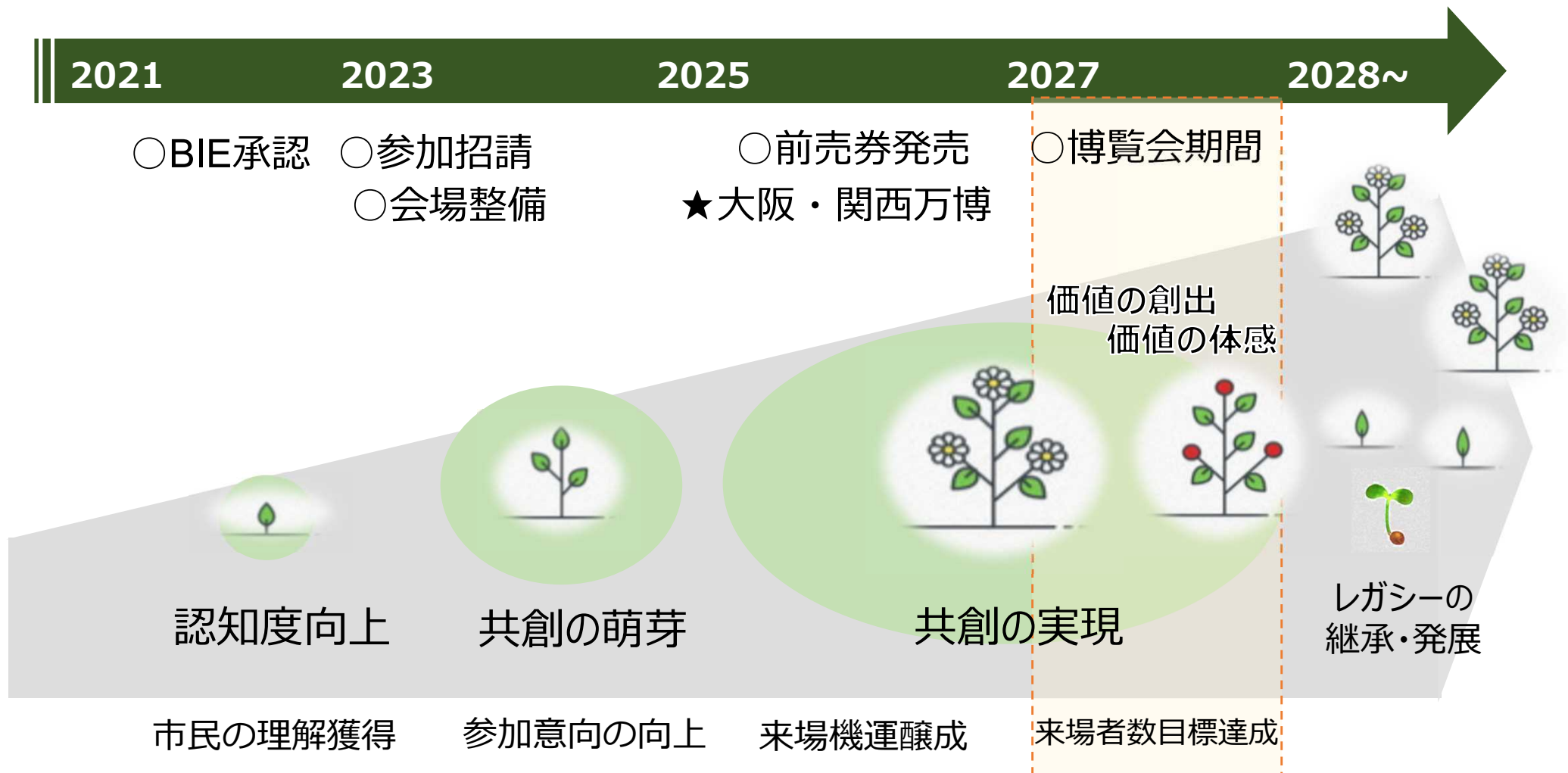
- ・ 参加者となりうる多様な主体をターゲットとし、「出展者」「来場者」「支援者」（理解者・応援者、報道・広告、出資者）に区分してアプローチ。



6. コミュニケーション計画の考え方

6.3 年次別の展開イメージ

- 「BIE承認」「参加招請」「会場整備」「前売券発売」「博覧会開幕・閉幕」など重要な事象を確実にとらえて、タイミング・内容で働きかける。



7. 輸送計画の考え方

7.1 基本方針

- ・ 想定来場者に対し、上瀬谷の地域特性を踏まえつつ、既存交通インフラや新たな交通を活用し多様なアクセスルートを確認する。
- ・ また、新しい技術を輸送アクセスにも積極的に取り入れる。

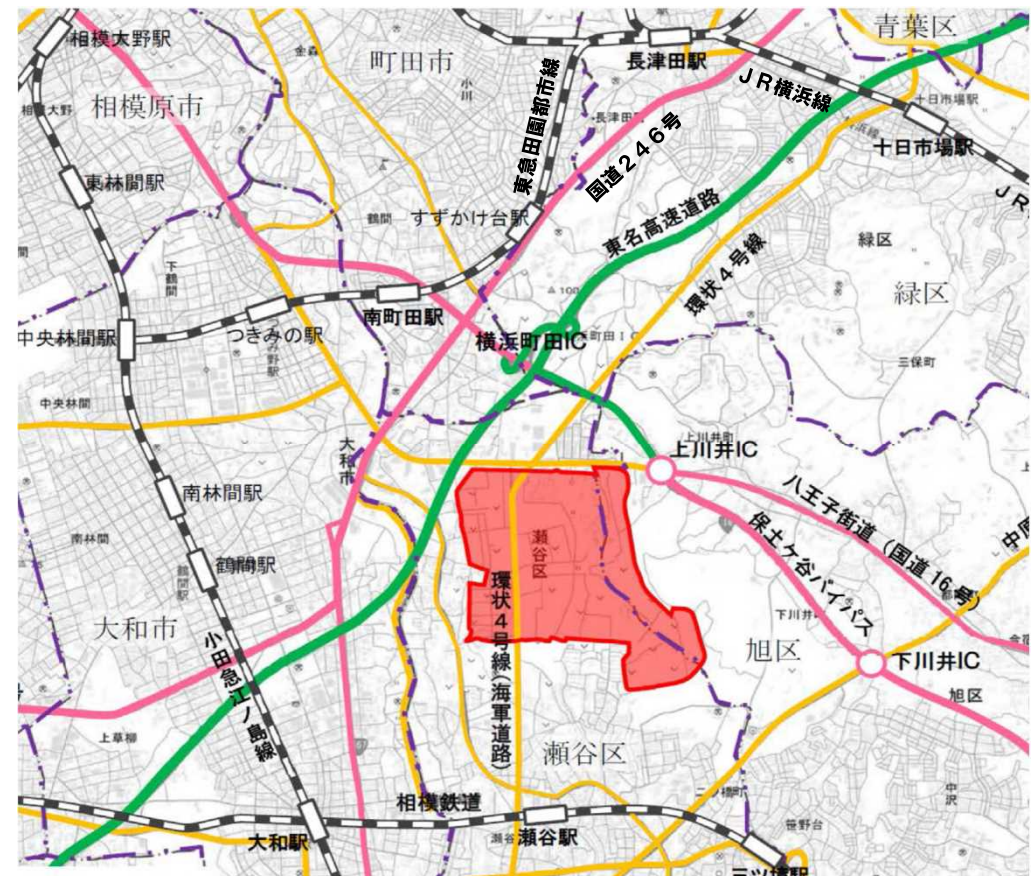
7.2 旧上瀬谷通信施設（計画地）の周辺状況

（1）鉄道

- ・ 計画地を取り囲むように「相模鉄道」「小田急江ノ島線」「東急田園都市線」「JR横浜線」がある。
- ・ 近隣の駅として、南側約2kmに「瀬谷駅」や「三ツ境駅」、北側約2kmに「南町田駅」などがある。

（2）道路

東名高速道路（横浜インターチェンジ）及び保土ヶ谷バイパス（上川井IC）などの広域道路をはじめ、国道246号、八王子街道（国道16号）、環状4号線、中原街道などの幹線道路が計画地周辺にある。



7. 輸送計画（総来場者検討）

【総来場者の検討方針】

次の視点から総来場者数を検討する。

【混雑度による検討】

- ①混雑度の設定
サービス水準やソーシャルディスタンス、
類似施設などの混雑度の設定

※混雑度：一人当たりの占有面積（㎡／人）

- ②同時滞在者数の算定
会場内において来場者が入れるエリア毎に
望ましい混雑度を設定し、同時に滞留する
人数を算定

- ③同時滞在者数から総来場者等の推計

【輸送アクセスによる検討】

- ①駐車場の規模、運用における来場ポテンシャルの変化

	会場P	P & R	シャトルバス	来場ポテンシャル
A	あり（多）	多客日のみ	あり	約1630万人
B	あり（少）	全日	あり	約1500万人
C	なし	全日	あり	約1200万人

- ② Aパターンの検討
- ・公共交通機関では各駅の乗降人員など是对応可能な範囲
 - ・一方で、会場周辺の交差点で著しい渋滞が発生

- ③対応案およびBパターン以下の検証を実施
- ・会場駐車場の規模縮小、会場から10km以内の公共用地や駐車場などをP & R候補地として選定
 - ・混雑やスペース、コスト等の課題に対し、繰り返し検証

【総来場者数の検討】

7. 輸送計画（総来場者検討）

①混雑度の設定

【混雑度の例】

- ・サービス水準(評価A) 3.20 m²/人
 - ・ソーシャルディスタンス 4.00 m²/人
 - ・過去博実績 4.15 m²/人
- 上記以外にも、会場エリアの特性に沿った混雑度について調査。



3.2 m²/人
(100m²あたり30人)



4.0m²/人
(100m²あたり25人)



6.25m²/人
(100m²あたり16人)



②同時滞在者数の設定

同時滞在者数 = 有効区域 ÷ エリア毎の混雑度
※有効区域：バックヤードや緑地等を除いた区域

【エリア毎の混雑度例】

- ・パビリオンエリア 4.0～3.2 m²/人
- ・自然エリア 6.0～4.0 m²/人

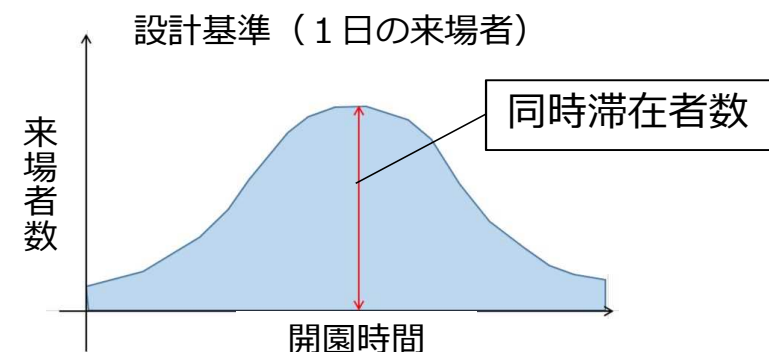
③同時滞在者数から「1日の来場者数」及び「総来場者」の推計

- ・1日の来場者数 = 同時滞在者 ÷ 80%
 - ・総来場者 = 1日の来場者数 ÷ 1%
- ※過去博の実績を参考。今後、入退場モデルを構築し再設定

<参考> ケーススタディ：同時滞在者と混雑度の関係

会場区域	有効区域	約12万人	約10万人	約8万人
80ha	36.0ha	3m ² /人	3.8m ² /人	4.5m ² /人
90ha	40.5ha	3.4m ² /人	4.2m ² /人	5.1m ² /人
100ha	45.0ha	3.8m ² /人	4.7m ² /人	5.6m ² /人
総来場者数		1500万人	1200万人	1000万人

※有効区域は会場区域の0.45とする



8. レガシー計画の考え方

- AIPHの一般規則において‘Post Expo Concept’として一般規則の中にも記載されているように、国際博覧会開催後におけるレガシー創出は不可欠。
- テーマの実現に向け、多様な主体による共創の熱意や意識変容・行動変容を持続・発展し、次世代に継承。
- 博覧会開催前～開催～開催後の時間軸を通じた参加者との共創を行い、「参加者自らが作った博覧会」という意識を醸成し、参加者自らが残したい、繋げたいと思う博覧会となるよう進める。
- 園芸博覧会が行われたことを象徴する施設やアートなどが、博覧会後も有効活用され、親しまれていくよう努める。

レガシー例

- 博覧会関連施設の将来まちづくりへの活用
- 「自らの手で花や緑を生活に取り込む意識」「美しい景観を維持する意識」「グリーンインフラの維持管理に積極的に関わる意識」の醸成によるグリーンコミュニティの形成、維持、発展
- 職住近接の新たなライフスタイルの定着
- 農業・園芸関連産業や新産業の発展、共創の取組の継承
- 「地球が環境容量の限界を迎えつつある中、生物はどのように存続し、繁栄していくのか」という問いを想起させ続ける本博覧会の象徴的なモニュメントなど

9. 事業費・事業スケジュール

本博覧会全体の事業構造の確立を早期に行い、各計画や事業費、事業スケジュール等の検討を進めていく。

■ 事業費

会場区域、施設配置や事業運営等の検討とあわせて事業費の検討を進めていく

【基本構想案時点（会場面積を80～100ha）】

会場建設費 190億円～240億円程度

運営費 320億円～360億円程度

■ 事業スケジュール

区画整理等のまちづくり事業の具体スケジュールと連動し、博覧会開催の基盤整備の詳細検討を進めていく

年度	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
国際園芸 博覧会	AIPH 申請 ・ 承認		閣議了解 BIE 申請 協議	閣議決定 BIE 申請 承認					国際園芸博覧会開催
	地元 推進 組織 設立	全国 推進 組織 設立	博覧会 協会 設立	会場計画・ 参加招請等 会場整備					
まちづくり 【区画整理・ 新たな交通】	環境影響評価								
	土地 利用 基本 計画	都市計画決定 事業認可 等					整備工事		